



七 ああ、ゾンビ休暇

その頃、ある商社の地域資源活用課では。

「課長。明日から会社を休みます」

若い男性職員が課長と呼んだ中年の男の席に進み出た。

「そうか。西城君も休むのか。実は、俺も休むんだ」

課長と呼ばれた男は椅子に座ったまま、何かを考えるかのように腕組みをしている。

「課長。あたしも当然休みます」

少し出遅れたことを後悔しながらも、自分の主義主張は決して譲れないという顔で若い女性職員も課長の席の前に立った。

「坂本さんもか？それなら、この課は、いや、この会社からは社員は誰もいなくなるぞ」

自分の責任を他人に譲るような口ぶりで課長は二人をじっと見つめた。

「でも、ゾンビになるくらいなら、その方がいいでしょう。このまま、この都会にいたら、ゾンビに襲われてゾンビになってしまいますよ。そうすると、この会社は社員全員がゾンビになってしまいますよ。そうすると、ゾンビ会社じゃないですか。ゾンビに会社が乗っ取られるじゃないですか。これまで取り扱っていた地域の特産品である、うどんやそば、果物、お菓子の代わりに、ゾンビの好きな、人間の生肉や生血、もしくは人肉の味噌煮や蒲焼の缶詰を取り扱わなくてはならなくなるじゃないですか。僕はそんなの嫌です。食べたくもないですよ。それに、ゾンビの出現のおかげで、久しぶりに故郷に帰り、お墓参りもしたいし、地元の盆踊りにも参加したいですよ」

若い男はそんなことは関係ないとばかりに早口でまくし立てる。

「ほんと、ぐずぐずしていたら、ゾンビに襲われちゃいますよ。盆踊りは今日が前夜祭なんです。家に帰ったら、浴衣に着替えなくっちゃ。それじゃあ、あたしも帰ります」

若い女性職員の心はもう実家に帰っている。

「ああ、そうだな。それじゃあ、当分の間、ゾンビ休暇とするか。会社にはそう申請するよ。
ああ、そうそう。西城君の実家はどこだったけ」

方針が決まり、気持ちがふっきれたのか、課長の顔に笑みが戻った。

「広島じゃけん」

「坂本さんは？」

「高知ちゅうきです」

「課長は？」

「俺か？俺は生まれも育ちも江戸っ子だ。下町だけだな」

西城と坂本は互いに、これはまずいというような顔で互いに見つめる。

「そうですか。それじゃあ、落ち着いたら連絡します」

西城の「連絡します」の言葉は、決して連絡しないように聞こえた。

「もし、万が一、課長がゾンビになったら、ゾンビになったと言ってくださいよ。ゾンビになったら、あたしは絶対に帰ってきませんから」

西城の婉曲な言い回しに比べて、坂本は思っていることをズバリと課長の顔に叩きつけた。

「ああ、わかっているよ。都会にだって、お墓も盆踊りもあるから大丈夫だ。それに、元々、ここは田舎だったんだ。急激に人口が増えて、いかにも都会になったような気がするだけだよ。それに、この都会に来た人たちだって、元々は、田んぼや畑のある田舎に住んでいたじゃないか。田舎から出てきて、人がたくさん住んでいる場所に住んでいるだけで、自分は都会人だなんて顔をするのもどうかだと思っよ。人の多さだけで都会か、田舎かを決めるのも変な話だよ。問題は、そこに住む人たちの生活の文化度だよ」

課長は悟ったように呟く。

「そうですね。そう言う意味では、この国の人みんな田舎人なんですね」

「じゃあ、課長。あたしも田舎人として田舎に帰ります」

「ああ。それがいい。この大田舎人が住む大都会に帰ってきたら、お互いに大田舎の話をお互いに自慢し合おう」

「わかりました。できるだけ、たくさんの自慢を探してきますじゃけん」

「あたしも探してきちゅうきに」

「二人とも、もう田舎に帰った気分じゃないか」

課長の言葉に西城と坂本は互いに顔を見合わせ笑い出す。

「ああ、くれぐれも、お墓参りだけは忘れないでくれよ。俺もゾンビになった二人には会いたくないからな。できれば、盆踊りにも参加してくれ。SNSの書き込みでは、墓参りと盆踊りさえしていれば、ゾンビに襲われないそうだ」

「それは課長も同じですよ。あたしたちだってゾンビになった課長には会いたくありませんから」

三人は顔を見合わせて大笑い。

「それじゃあ。元気で」

「元気じゃけん」

「元気ちゅうきに」

こうして地域振興会社の地域資源課は課あげてゾンビ休暇を取ることであり、足早に、自分の大田舎へと帰っていった。その解散する様子を部屋のドアの隙間から覗く三体のゾンビがいたことを課長を始め、西城も坂本も気付かなかった。

盆踊りは三日目を迎えた。ほとんど夢遊病者のように踊り続ける中垣たち。本当は休みたいのだけど、座ると、ゾンビが顔を近づけてきて、今にも首筋に噛みつきそうなそぶりをするのだ。ゾ

ンビにだけはなりたくない。中垣は条件反射のように飛び上がる。だが、踊りをする手は上に上がらない。胸の前で、ピグモンのように手首だけを突き出すだけだ。足は膝が上がらない。能のようにすり足で地面をすっていただけだ。周囲の人から見たら、まさに歩くゾンビの姿だ。

精神はゾンビにはなっていないものの、肉体は既にゾンビ化している。ゾンビと一緒に踊っても違和感はない。そうか。中垣は気付いた。ゾンビたちはこうなることを待っていたんだ。ゾンビと人間の一体化。つまり、死体も生きている人も同じだということだ。死は特別なものでもなく、また、生も特別なものではないのだ。

だけど、いくらゾンビを理解しても、盆踊りを踊り続ける体力は既にある。また、足腰が筋肉痛で、ゾンビに出会った時のように悲鳴を上げている。こうして、人間たちは体力的に限界に近づいているにも関わらず、ゾンビたちは踊り続けている。このパワーの差は何だ。人間はやはり死んだ気になれば何でもできるのか。いや、死んだ気じゃなく、死んだら何でもできるのだ。

こうなればゾンビになるしかない。休んでいても、ゾンビに追い立てられ、顔の前でいかにも首筋を噛むぞ、と脅され、嫌々踊っているのが現状だ。このまま、体が動かなくなるよりも、ゾンビに噛まれてゾンビとなり、踊り続けた方が楽なのかもしれない。高いところから低いところに水が流れるように、中垣の心は、ゾンビ化へと流れていこうとしていた。

「あああ」

「きゃああ」

踊りをさぼっている人たちが自ら首筋をゾンビに差し出して噛まれてはゾンビとなっている。やはり、みんなも同じ気持ちなのだ。現状が辛いから、自ら進んでゾンビとなり、何も考えずに踊ろうとしているのだ。例え、それが将来、多くの、かつ、高い損失につながるとわかっているのだ。

中垣もとうとう精神の変調を来し、自らゾンビになろうと、フラフラの体をふらふらさせながら、ゾンビに近づいていく。

「中垣さん」

誰かが中垣の肩を掴んだ。それも手を置くというよりも驚掴みと言った方がよい力強さだった。

「痛い」

肩に指が食い込んでいるのではないかと思うぐらいに激痛が走った。だが、そのおかげで、今までの夢遊病者のような気持が現実を直視する気持ちに切り替わった。

「ゾンビになったらお終いです」

これまで優しさしか見えなかった木本さんの顔がまさにゾンビのように鬼神に見えた。

「何とかしましょう。何かいい方法があるはずですよ」

と、力強く頷きながらも、その場に座り込んでしまった。

「木本さん」

中垣は木本さんを抱きかかえると本部テントに連れて行った。木本さんも疲れているんだ。その疲れている体で、ゾンビになるのを阻止してくれたんだ。何とか、木本さんのためにも、踊り疲れている町の人のためにも、この盆踊りをやめないといけない。

今夜だけでも、シンデラボーイという歌詞が、今夜からは死んだボーイに聞こえてならない。それこそ、ダンシングヒーローじゃなくて、ゾンピングダークヒーローだ。ゾンビに僕らは踊らされているのだ。ゾンビが出現した時は、自ら盆踊りに参加してくれたり、盆踊りに参加していない地域の人をこの場所に追い立ててくれたりして、盆踊りを盛況にしてくれたことには感謝している。確かに、ゾンピングヒーローだった。だが、今の、この状況な何だ。ゾンビが自分たちを追い詰めているのだ。まさに、ゾンピングダークヒーローだ。だが、現状を憂いていても、嘆いていても仕方がない。

「何かいい手はありますよね。何かいい方法があるはずですよ」

ぐったりと椅子に体を投げ出している木本さんに、さっき木本さんから言われた言葉を自分に納得させるように繰り返す。

「そうだ。いい考えを思いついたぞ」

中垣の顔に笑みが浮かんだ。中垣の頭の中にLEDほどではないけれど、豆電球ぐらいの明るさが灯った。早速、スマホでググリ、ヤフリ、楽天する。

「あった」

郷土愛夫。文化人類学者だ。以前、テレビ討論会でゾンビについて語っていた有識者の一人だ。番組は、結果的に、ゾンビに乗っ取られたが、一番まともというか、ゾンビに対抗できるのはこの人しかいないと思えた。でも、あの放映時に、スタジオはゾンビに占拠されたけれど、郷土先生は大丈夫だろうか。まさか、ゾンビになっていないだろうか。もし、万が一、ゾンビに変身していれば、もう頼むあてはない。郷土愛夫のSNSを開く。そこには、「このゾンビ化した社会をなんとか救いたい。何か手がかりのある人は、私にまで連絡ください」とコメントが掲載されていた。

よかった。この時点では郷土先生はゾンビにはなっていない。だが、自分と同じように、いつ、ゾンビになってもおかしくない状況だろう。郷土先生がゾンビになる前に、また、自分がゾンビになる前に、何とか連絡を取らないといけない。よし、頼もう。頼むしかない。中垣は友達リクエストを使ってメッセージを送る。

「僕が住んでいる町では、一週間前からゾンビが現れて、盆踊りが続いて行われています。そして、その盆踊りはゾンビによって乗っ取られています。踊っている間は、ゾンビに襲われることはありませんが、踊ることをやめればゾンビに噛まれて、ゾンビになってしまいます。だから、踊りたくなくても。踊り続けられないといけないのです。ですが、踊りでもうくたくたで、ゾンビに噛まれなくても自然にゾンビ化してもおかしくない状況です。先生のことは、テレビで拝見しました。どうか、この町の人たちを、この町を助けてください」

メッセージのボタンを押す。すぐさま、郷土さんから返信があった。そう、郷土先生はまだゾンビに変身していなかったのだ。

「連絡をいただきありがとうございます。一週間前からゾンビが現れたそうですね。私が調べたところによると、ちょうどその頃から、ゾンビが出現したようです。いわゆる、ゾンビの発生地はその辺りのようですね。それに、ゾンビが盆踊りをするという事、盆踊りを踊っている間は、ゾンビに襲われないということから、何か、その町にゾンビの出現の理由があるように思えます。すぐに、そちらに向います」

「ありがとうございます。こちらは〇〇県△△市□□町です。盆踊りの場所はxx神社前の広場です。連絡いただければお迎えにまいります」

中垣がすぐさま返信する、

「そうですか。〇〇県ですか。私が今いるのは、お隣の◇◇県です。ゾンビ出現の件で調査のため全国を周っているのです。ちょうど、今、そちらの県へ向っているところでした。一時間以内

に参ります」

郷土先生からもすぐさま返信があった。その返信を大きく目を凝らして見つめる中垣。やったあ。これで何とかなる。いや、何とかして欲しい。木本さんに郷土先生とのやりとりのメッセージを見せる。

「そうですか。それはありがたい。私も実はもう限界なんですよ。何とか氣力を振り絞って、立っているだけです」

木本さんの言葉には実感が込められていた。木本さんも相当疲れているんだ。その証拠に、立っているだけです、と言いながら、パイプ椅子に座り込んだままじっとして動こうともしない。本来ならば、こうして踊らずに休んでいると、ゾンビに襲われるはずなのだが、ゾンビもこのテントが盆踊りの実行委員会の本部とわかっているのか、今のところ近寄ってくる気配はない。だが、将来にわたってその保障はない。こちらが、ただ単に、踊りたくないから休んでいるのだと気づけば、必ず、ゾンビたちは襲ってくるだろう。後一時間を何とかしてしのがないといけない、

一時間後には、ゾンビ研究の第一人者でただ一人の研究者、そう、他のゾンビの有識者たちはゾンビ化してしまい、研究するのではなく研究対象になっている、がこの場所にやって来る。さっきの話では、全国のゾンビの状況を調査しているとのことだから、何かいい対策方法を知っているのではないか。ああ、今、待ち遠しいのは、盆踊りをするのではなく、盆踊りをやめることだ。